

ループリック利用による異文化理解・対応能力向上の可能性

佐伯 瑠璃子

1. はじめに

近年の急速なグローバル化により、実際の場面で運用可能な英語力が社会に求められるようになり、同時に異文化に対応する能力も学校教育で身につけることが求められるようになった。しかし、近年の高等教育における英語を取り巻く現状は好ましい方向に向かっているとはいえない。2020 年から初等教育においては教育改革が行われ英語教育が全面的に導入された。中等教育では 4 技能の能力を高めることがさらに求められるようになり、グローバル化が加速する国際社会で運用可能な英語の習得を急ぐ傾向にある。しかし実際のコミュニケーションに焦点を当てると、必要となる能力は英語力だけに止まらない。外国語のコミュニケーションに欠かせない要件の一つに異文化理解能力が挙げられるが、それを教育現場で身につけさせるのは容易ではない。なぜなら、文化の理解をコミュニケーションに連携させるためには、異文化を単に学習するだけではなく、予測不可能な異文化接触に柔軟に対応する力をつけさせるという達成目標に向けての標準化した学習方法の確立や目標設定は非常困難であるからだ。

近年、高等教育ではループリック利用による学習成果の評価が注目され、それは英語教育においても導入されている。目標を明確に設定し評価指数を設けることで、客観性と共通性の高い評価を行うことを目的とするものである。ループリックはあくまで評価の道具であるべきだが、実際の導入例ではループリックの導入と使用のみが目標となってしまう事例が散見される。安易なループリックの導入からは、目標とする教育改善に直接的な効果は得られないだろう。いかにそれを適切に使用し、効果を得られるように運用するかを検討、工夫する必要

がある。また、高等教育の現場においては中等教育で養った能力をさらに実践的に活かす場がより多様な授業や国際交流、留学といった形で設けられている。それらの機会を有効活用し、いかに効率的に学生の異文化理解能力を向上させることができるかを探る。今回はループリックの形式を取り入れるが、ループリックによる評価のみに頼るのではなく、並行した課題を設けることで異文化理解能力及び対応能力をより向上させることができないか、試験的な検証を行った。その検証方法と結果を本論文で示す。

2. 教育で求められる異文化理解・対応能力

近年のグローバル化における異文化理解の必要性は教育現場にも影響を与えていることは言うまでもない。2020 年には初等教育でも全面的に英語教育が導入された。そして、中等教育でも今後新学習指導要領が実施され「英語教育改革」が推し進められていく予定である。すでに一部の高等学校では先行実施されている新学習指導要領では、思考力や表現力を伴った英語のコミュニケーション能力の向上を図り、主体性を持ち様々な人と協働できる英語力を備えられるよう教育を行うことが求められる。2018 年 3 月に告示された『学習指導要領』において、英語科の目標は次のように示されている。

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、英語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 英語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにする。

(2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、英語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができ力を養う。

(3) 英語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自律的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

(文部科学省 2018,p460)

文部科学省の発行する『学習指導要領(解説)』においても、外国語によるコミュニケーションにおける見方を「外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」と示している。(文部科学省 2018,p12) つまり社会との関わりの中で事象を捉え、背景にある文化を理解し相手に配慮しながらコミュニケーションを行えるよう英語教育の中で工夫をしていくということであろう。現在のグローバル化社会の中で、英語母語話者が約 3 億 7900 万人であるのに対して、世界のあらゆる地域で第二言語としての英語話者と英語学習者の合計者数は 10 億人、11 億人をも超えると言われている。この人数の算出方法は様々でありその方法も別途言及されるべき点ではあるが、英語母語話者の数を圧倒的に上回っていることには違いない。このような状況下においては、英語話者の文化背景に配慮しながら

らコミュニケーションが取れるよう、その力を英語教育の中で身につけさせることは非常に困難なことであると考ええる。英語 4 技能をアクティブラーニングにより学習することと共に、別途異文化間コミュニケーションを円滑に行えるよう、異文化理解能力と異文化対応能力を養うことに重点をおいた教育をしなければ、このような理想を実現させることは不可能である。外国語に触れること自体は異文化の側面に触れることでもあり、使用教材によってはそこで取り扱われる内容からその文化の様々な事象に触れることも可能である。しかし、英語教育の中で単に他文化に関する事柄について英語で読み、それについて語ることや、英語によるアクティブラーニングを行うだけでは、文化の一端を知ることができたとしても、それは異文化を理解し、対応する力が身についたとは言えない。グローバル化と共に世界中に広がった英語話者とのコミュニケーションを考えた場合、学校教育の現場において言語に加え文化の理解を向上させる教育を行うことは現実的に困難であろう。初等教育及び中等教育において英語の基礎を定着させ、英語 4 技能の向上を目標とすることは重要である。そして、高等教育については特に英語教育と異文化コミュニケーションや異文化理解は切り離してその能力向上を試みる必要がある。言語の知識やスキルはもちろん必要であるが、個々人においての定義が曖昧にならざるを得ない「文化」「異文化」を学生自身が認識し、それらを自らの手で探っていく経験、自文化を学び、他文化の存在を知り、それらを客観的に比較することができる能力、これら異文化間能力(Intercultural Competence)は異文化間コミュニケーションにおいて最も重要な能力の一つである。

Byram (1997)は異文化理解に必要な能力をモデル化し、異文化間コミュニケーションモデル(Intercultural Communicative Competence)を提示した。外国語教育に関わる異文化理解能力の定義として頻繁に引用されており、言

語の知識やスキルではなく、異文化間能力の重要性が示されている。異文化間能力の構成要素は主に「態度」「知識」「スキル」であるとして、(表 1)の 5 つの構成要素を提示した。

(表 1)

態度 (attitude)	<ul style="list-style-type: none"> ・好奇心があり、開放的な態度。 ・自分の視点を相対化し、他者を大切にすること。 ・新しいことを学習する積極的な姿勢を持っている。 ・自身とは異なる他者の信念や行動に対する不信感や判断を保留すること。
知識 (knowledge)	<ul style="list-style-type: none"> ・自身が所属する社会集団及び他者が所属する社会集団に関する知識がある。 ・社会レベル、個人レベルで他者との確かなインターアクションをする知識がある。
解釈と関連付けのスキル (skills of interpreting and relating)	他文化の文書や出来事を解釈することができる。またそれらを自分の文化に関連付ける方法を知っている。
発見と相互対話のスキル (skills of discovery and interaction)	文化的慣習について新たな知識や価値観を発見し習得できる。また実際のコミュニケーションで知識を適用することができる。
教育環境：批判的文化アウェアネス(Critical cultural awareness)	様々な文化の明示的観点及び基準を元に、出来事やテキストを評価することができる。

(Byram 1997, p34 より抄訳作成)

この中でも文化や言語に対する多様性への好奇心と敬意、他者への寛容な姿勢と関係性構築、といった「態度」は重要視し、自分自身の価値観や信念、行動を相対化する意欲であり、これが異文化間に関わる能力の基盤であるとした。

(Byram et al.,2002 p12)

3. VALUE ルーブリック

実際に異文化理解能力をいかに向上させるかという課題に対して、ルーブリックの導入の有効性が考えられる。ルーブリックとはある課題に対して幾つかの構成要素に分け、その要素ごとに評価基準を満たすレベルを詳細に説明するものである。ルーブリックを用いることで、能力向上に活かす基準を作成し、文化を理解する能力という曖昧な事柄に評価指数を与え可視化することができる。これにより、目標達成を目指す特定の項目を配置し、評価をすることが可能となる。異文化理解能力に関するルーブリックには、州立、私立、コミュニティカレッジ、研究大学など現在約 1,300 の機関が加盟している 1915 年に設立された大学団体 Association of America Colleges and Universities (AAC&U) が作成する「異文化知識・対応能力に関する VALUE ルーブリック」がある。今回はルーブリック作成にあたりこのルーブリックを参考とした。これは Valid Assessment of Learning in Under-graduate Education (VALUE) というプロジェクトにおいて作成されたルーブリックの一つとしてインターネット上にも公開されている。(AAC&U,2018)。活動の一つとしてリベラル教育の質や公的評価を高めることを目的としており、新しい実践的なリベラル教育を目指し、2005 年から Liberal Education and America's Promise (LEAP) という取り組みを行なっている。ここでは現在の複雑化するグローバル社会で必要となる能力を身につけることが求められる学士課程における本質的学習成果(Essential Learning Outcomes)が示されている。この中で学生の学習到達レベル測定のため

に 2007 年に VALUE ルーブリックが開発された。

VALUE ルーブリックの導入は高等教育における質の評価方法に標準化されたテストが使用され学習成果として評価されることに対して、学習時間の経過とともにより複雑な評価が必要とされる学生の学習能力に対応する柔軟な学習能力向上と評価を実現できる評価方法であるとしている。VALUE の指針は次のように示されている。

1. 質の高い教育の提供のため、計画、教育、及び改善へ導くための有効な評価データが必要である。
2. 大学においては、現在利用されている標準化されたテストの使用よりも、さらに適切な育成と学習成果の評価を行う。
3. 学習は時間の経過とともに発展し、それは学位取得に向けたカリキュラムを進むにつれてより複雑で洗練されたものになるべきである。
4. 評価の優れた取り組みは学生の作業に焦点を合わせ、時間の経過とともに複数の評価が必要になる。
5. 十分な計画がなされているデジタルポートフォリオは、学生の学習を導き、自己評価機能を構築し、教育機関内あるいは教育機関間での実証学習といった、幅広い学習成果の多様な評価からデータを収集する機会を提供するものである。

(AAC&U,2015 より抄訳)

本調査ではいかにして異文化理解及び対応能力を向上させるかということに着目しているが、語学力と異文化理解及び対応能力に関連性はあるが、相関関係があるとは言えない。元より、同じ国であっても個々の文化的認識は様々ではない。外国語の習得とは異なり、文化の習得とは教科書の中で一様に取り扱うことができるルールは無いに等しい。そのような文化に関わる

能力の教育においては、個々に柔軟に対応し、また各々が直面する環境によっても柔軟に対応能力が求められる。今回参考とした VALUE ルーブリックはその柔軟さに対応しうるものである。なぜなら、LEAP の目的の一つは、新世紀のリベラル教育により多様なグローバルコミュニティに積極的に参加できる人材を育てることである。また、この取り組みにより学生を取り巻く環境において直面する具体的な問題に対応する能力を育て、理論を実践から得られた洞察力と結びつけることで最も強い効果が生まれると述べられている。(AAC&U, p25-26) つまり、VALUE ルーブリックは我々が必要とするグローバル社会の多様性に柔軟に対応する能力を育てることを目的として作成されている。今回ルーブリックを試作するにあたり参考とする「異文化知識・対応能力に関する VALUE ルーブリック」は Bennett (1993) の異文化感受性モデルと Deardorff (2006) の異文化の枠組みが参考とされている。これらからルーブリックに取り入れられた構成要素もまた、Byram (1997) と同様に態度、知識、能力が主軸となっている。この VALUE ルーブリックを元に、外国語教育に関わる異文化間コミュニケーションのモデルを作成した Byram (1997) の示すその構成要素に関する内容も取り入れ、今回試作のために利用するルーブリックを作成した。

4. 検証に用いるルーブリック

AAC&U が公開する「異文化知識・対応能力に関する VALUE ルーブリック」には、「段階的達成レベルを能力指標により、各学習成果の原則的な基準」であり、成績を付けるためのものではなく、「学生の成果に関し共通の手段と理解を共有する」ことで学生の学習を「一つの基本的期待レベルの枠組みで位置付けるためのものである」ことが明示されている。このルーブリックを使用することにより、異文化理解及び対応能向上に向けて、共通の手段と理解を共有することがルーブリックを導入することによ

って可能になる。また、学生の能力に柔軟に対応することが可能であり、その学修効果を学生及び教員が考察することができる。学生に対して、異文化知識に関する共通理解の共有と、対応能力の目標達成における期待の枠組みの提示を行い、それを用いて自己評価させることで、自身の異文化理解に必要な項目が明確となり、その向上に役立てることができると考える。また、上述した VALUE の指針の 5 に示されているように、自己評価機能が構築されていることから、ルーブリックを学生自身の自己評価基準として使用することが有効であると判断した。一方、VALUE ルーブリックの中では文化は「一つの集団で共有される全ての知識・価値観」とされているが、「一つの集団」の単位は明確では無い。ある一つの集団においてもその価値観や常識についての認識は異なる。そのため、他者（教員）の評価だけに頼ると、それは評価を行う者の文化基準が反映されてしまう。そのため、自己評価に用いることで、より柔軟に能力向上に貢献し得るものとなると考えた。

今回の検証の被験者は留学へ向かう学生とした。留学体験は高等教育の中でも異文化を直に体験できる大切な機会である。しかしその主な目的はこれまで語学留学や学問的知識の習得に重点が置かれ、留学した国における生活や体験が異文化理解能力や対応能力の向上にどの程度効果があるかは明確ではない。特に本学の語学留学においては、英語の習得が目標となっており、学生自身が英語力向上を目標とするものの、異文化理解の能力向上を目指しているとは限らない状況であった。今回はそのような語学留学を目的とした留学であっても異文化接触が頻繁に起こる環境下で異文化理解及び対応能力向上に働きかけることができるよう、VALUE ルーブリックを参考に Byram (1997)の異文化間能力の要素を取り入れた評価指標を設定した。今回の検証に用いたルーブリックは[資料 1]である。学生が理解しやすいよう、できる限り平易な表現を用いた。

しかし、ルーブリックを学生のみによる自己評価として用いる場合、2つの問題が考えられる。まず、学生の主観による評価により客観的な評価が行われない場合、その効果が正しく得られない。また、学生が正しくルーブリックの内容を理解していない場合などは、実践に結びつけることが困難であり、その効果が得られない可能性がある。そのため、本検証においてはルーブリックに挙げられる項目を実践と結びつけるため、インタビュー課題を別途設定した。そのインタビュー課題の内容は次の通りである。

[インタビュー課題]

1. 家族に関するインタビュー

- ① インタビューをした人について：関係、国籍、性別、名前、在住期間
- ② 家事や育児の父母の分担について：どのように分担されているか。
- ③ 夫婦以外に育児や家事に得ている協力関係はあるか。（具体的に、親類、知人、国や自治体、企業などの協力体制はどのようなものか。）
- ④ 女性は積極的に社会進出をしているか。
- ⑤ 男女に顕著な職種の違いはあるか。（具体的にどのように違うか）
- ⑥ 働く母親は、どのような職種でどのような働き方をしているのか。

2. 日本に関するインタビュー

- ① インタビューをした人について：関係、国籍、性別、名前、在住期間
- ② 日本、日本人について知っていることは何か。またどのようなイメージを持っているか。

*以下はインタビューではありません。交流を持って、その様子を記述してください。

- ③ ②について、自分が知っている現状を伝えてみましょう。相手の日本についての知識やイメージにどのような変化がありましたか。

- ④ 上の 2 と 3 のやり取りの中で、あなた自身も日本に対する認識は変化しましたか。
- ⑤ インタビュー相手の国について、あなたが知っていることやイメージを伝えてみましょう。どのようなことを伝えたか、そして相手はどのようなことを教えてくれましたか。感想も書いてください。

題目は「家族に関するインタビュー」と「日本に関するインタビュー」である。インタビューは、ループリックで評価を行う異文化間コミュニケーションの主な 3 つの要素に関わるよう作成を試みた。まず、内容は自文化と他文化の文化的知識向上に関わるものである。また、留学先で使用される言語でインタビューを行うことにより、語学力向上も期待できるとともに、言語・非言語コミュニケーションに関わる能力向上も期待できる。そして、インタビューという能動的な行動は異文化理解の姿勢に大きく影響する。そのため、インタビューを行うことにより異文化理解の評価に示した主な 3 点の要素に関わる能力をより伸ばすことができると考え、ループリックによる自己評価との相乗効果を期待した。学習者も課題を通してループリックに記載がある目標達成に向けた具体的な行動をすることができるため、より能力向上に期待ができる。このインタビュー課題の利点は他にもある。学生の自己評価だけに頼らず、教員が評価する際にも評価基準に関わることを実行できているか、それらが評価に反映し得るものかを判断することができることである。このように、本検証では、VALUE ループリックの本来の目的を基盤としたループリックの形式を用いて、さらに自己評価による異文化理解能力向上を有効なものとするインタビュー課題を組み合わせることで、学生と教員の双方の評価を可能とし、最も効果的な異文化理解及び対応能力の向上を目指すことが可能であると仮定し、検証を行った。

5. 検証方法及び検証結果

まず被験者と被験者に与えた具体的な指示について述べる。今回の検証の対象者は約 6 ヶ月英語圏へ留学をした学生 7 名である。出発前に研修を行い、出発前の課題としてループリックについてその目的と内容の説明を行なった。そして、ループリックにて評価点をつけさせ、現在の自分の位置を確認させた上で、留学先に滞在中もこれらのことを意識して過ごすよう指示した。そして、留学中には前章で挙げたインタビュー課題を少なくとも 1 ヶ月間に 1 名、英語を使用して行うよう指示した。インタビューを行う相手は日本人以外であれば国籍や年齢を問わない、とした。そして、帰国後にループリックによる自己評価を再度行わせ、異文化理解及び対応能力にどのような変化があったのかを探った。この比較の実施は、学生自身も評価値を留学前と留学後に比較を行うことで、自分自身がどの項目においてどれだけその能力を向上させることができたか、また何が不足していたかを考察することが可能となり、ループリックの効果を最大限に生かすことができると考えたからである。このように、留学前の自己評価、そしてインタビュー課題を課す、留学後の自己評価を行なった。

これらの課題を通して、7 名の自己評価点がどのように変化したのか、[資料 2]にその結果を示した。この検証から明らかになったことは、まず自己評価点は総合的に上昇していることが分かる。一方で自己評価点が留学前と留学後で変化していない、また減点となっている学生もいる。特に評価点に変化が見られない項目は「自文化」に関する文化的知識、及び「好奇心」「寛容性」の異文化への姿勢に関する項目であった。インタビュー課題を確認すると、「自文化」に関して、インタビューの感想欄で、日本の文化について被験者自身が認識していない事柄に触れたということや、日本の文化について想定より知られていない、また事実と異なる認識を持っていたが、それについての説明ができない、と

いった経験が記されていた。従って、点数に変化が見られない点についてはそれらの項目について、インタビュー課題を通して自身の認識の度合いを正しく認識することができた結果であると考え。「姿勢」に関する部分では「寛容性」に関して約半数が2ポイント以上ポイントを上昇させているが、「好奇心」についてはあまり変化が見られなかった。好奇心や探究心といったことに対しては、積極的に行動することができていなかった可能性が考えられる。一方で「寛容性」に関する評価点の上昇は、自分自身の文化を客観視して、異なる文化へ対応する能力向上を意味している。インタビューや日々の生活を通して留学前の自己評価時点では気付くことができなかった自己の異文化に対応する力を認識できたのではないかと考察する。

6. ルーブリック利用の可能性と今後の課題

今回の検証により、前述したような効果も見られたが、今後の課題も明らかとなった。まず、自己評価点の変化が少なかった「好奇心」についてである。2018年に筆者が行った異文化理解に対する調査、『語用論的能力と異文化理解の関連性・異文化理解に対する意識調査-』では、異文化接触の際に重視している異文化間コミュニケーションの構成要素について、「好奇心」は「寛容性」よりも重視されていた。そのためインタビュー課題の利用で十分に学生へ探究心や好奇心を持たせることができると想定していた。しかし、学生の意識の高さと、今回の検証の結果の相違は、学生自身が体験の中で、疑問を持ちその答えを探究することへの難しさの表れではないだろうか。この能力の向上を目指すには、併用課題をできる限り学生自身の興味や関心を生かすものにする必要があるだろう。学生自身の関心ごとを利用した自由度の高い質問項目をインタビュー課題に設定の必要性が考えられる。

次に今回作成したルーブリックについてである。平易な表現にしたことにより、学生がその本質を捉えきれない可能性がある。口頭での説

明は行ったが、それでは不十分であろう。ルーブリックの表記を工夫する必要があると同時に、異文化理解や異文化間コミュニケーションに関する基礎概念を事前に学修することにより、ルーブリックの効果がさらに期待できるだろう。また、今回参考としたVARUEルーブリックはアメリカでの異文化理解が基準となっている。歴史的に多様性に富んだ文化が触れ合ってきた国の異文化理解の姿勢と、日本人の異文化理解の姿勢は元より異なる。この点が「好奇心」に関わる部分にも影響しているのではないだろうか。ルーブリックの改変にあたり、まず日本人学生の現状を調査し、より日本人学生の性質に合ったものに改変する必要がある。

今回の検証により、ルーブリックによる自己評価による欠点をインタビュー課題の併用により補うことができることが分かった。実際の経験の中で異文化間コミュニケーションの構成要素に意識的に触れることができたため、全体的な評価点の上昇、つまり異文化理解及び対応能力向上への効果が見られたと考える。ルーブリック及び併用課題の内容について、改変の必要な点も明らかとなった。今後も今回の検証で明らかとなった問題点から、これらの改変及び検証を繰り返し、異文化理解能力・対応能力向上の効果を最大限に引き出す方法を検討する。

参考文献

1. Association of American Colleges and Universities, *Greater Expectations: A new vision for learning as a nation goes to college*. Washington, DC: Association of American Colleges and Universities, 2002
2. Association of American Colleges and Universities, *College learning for the new global century: A report from the national leadership council for liberal education & America's promise*.

Washington, DC: Association of
American Colleges and Universities,
2007

3. Byram, M. *Teaching and assessing intercultural communicative competence*, Clevedon: Multilingual Matters, 1997
4. Byram, M., Gribkova B. and Starkey H. *Developing the Intercultural Dimension in Language Teaching - A Practical Introduction for Teachers*, Strasbourg: Council of Europe, 2002
5. 佐伯瑠璃子『語用論的能力と異文化理解の関連性・異文化理解に対する意識調査-』, 神戸海星女子学院大学教育研究紀要第2号, 2018
6. Association of American Colleges and Universities, *The LEAP Challenge: Education for a World of Unscripted Problems*, 2015
<https://www.aacu.org/sites/default/files/files/LEAP/LEAPChallengeVALUE.pdf>
最終閲覧日 2020 年 11 月 27 日
7. Association of American Colleges and Universities, 「異文化知識・対応能力に関する VALUE ルーブリック」
http://www.jheds.or.jp/pdf/4intercultural_knowledge_and_competence.pdf
最終閲覧日 2020 年 11 月 27 日
8. 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成 30 年告示) 解説 外国語編 英語編』, 2018
https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf
最終閲覧日 2020 年 10 月 28 日
9. 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)』, 2018
https://www.mext.go.jp/content/138466_1_6_1_3.pdf
最終閲覧日 2020 年 10 月 28 日

異文化知識・対応能力に関するルーブリック

		最終基準 4	中間基準 3	2	ベンチマーク 1	0
文化的知識	自文化 (自分が属する国の文化)	自分が属する国の文化や文化的ルール*について他文化に属する人々に全てを明確に説明することができる。	自分が属する国の文化や文化的ルールについて適切に認識し、他文化に属する人々に多くを説明することができる。	自分が属する国の文化や文化的ルールについて部分的に認識し、他文化に属する人々に自文化について一部でも説明することができる。	自分が触れている他文化が自文化と異なることは理解しておらず、それが何かを見分けることはできない。	自己の文化的ルールをほとんど認識しておらず、他者との文化的違いに触れることに抵抗がある。
	他文化	異なる文化及び文化的ルールについて多くを得ることができたり、それらを明確に説明することができる。	異なる文化及び文化的ルールについて多くの適切な知識を持っている。	異なる文化及び文化的ルールについて部分的な知識を持っている。	異なる文化及び文化的ルールについて表面的な知識しか持っていない。	異なる文化や文化的ルールに関して何も知識がない。
	共感	自己の文化との違いを認め、異なる文化に属する人々の気持ちを認識し、相手を支持するような行動や対応ができる。	自己の文化と異なる文化に属する人々の行動や価値観があることを認め、部分的にでも相手を支持するような行動や対応をすることができる。	他文化には自己の文化と異なる要素があることは認識しているが、異なる文化に属する人々に対して自文化に基づいて考え対応するよう努めた。	自己の文化を標準にして、異なる文化の人々の行動や価値観について考える。	全てを自己の文化に基づいて考え、異なる文化の人々の行動や価値観について理解することができていない。
能力	コミュニケーション能力	言語及び非言語コミュニケーションに関する文化的違いについて理解しており、明確に述べることができる。また、その違いの認識に基づきうまく交渉して共通の理解を得ることができる。	言語及び非言語コミュニケーションに関する文化的違いを認識し、その違いの認識に基づき共通の理解を得るために交渉しようとする。	言語及び非言語コミュニケーションに関する文化的違いをいくつか認識している。また、その違いにより誤解が生じる場合があることも認識しているが、共通の理解を得るよう交渉することはできない。	言語及び非言語コミュニケーションに関する文化的違いをほとんど認識していない。	言語及び非言語コミュニケーションに関する文化的違いを全く認識していない。
	好奇心	異なる文化に関して深い疑問を持っており、それに対する答えを探求し、得た答えを明確に述べることができる。	異なる文化に関し、深い疑問を持っており、その答えを探求している。	異なる文化に関し、単純な、あるいは表面的な疑問を持っている。	異なる文化について学ぶことに興味を持っているが、漠然としている。	異なる文化について学ぶことに興味がない。
姿勢	寛容性	異なる文化を持つ人々と自発的に関わり、その関わりを発展させている。	異なる文化を持つ人々と自発的に関わり始め、その関わりを発展させている。	全てではないが、ほとんどの異なる文化の人々との関わりを持つことを受け入れる。	異なる文化を持つ人々との関わりを受け入れることはするが、その判断に時間を要する。	異なる文化を持つ人々との関わりに抵抗がある。

*文化的知識の欄にある「文化及び文化的ルール」とは歴史、政治・経済、価値観、考え方、習慣的行動、コミュニケーション方法などである。

[資料 2]

2019年度留学

ルーブリック[異文化理解・対応能力]結果 (中期留学)

2019年8月配布 - 2020年2月回収

中期留学7名		4ポイント上昇	3ポイント上昇	2ポイント上昇	1ポイント上昇	変化無し	1ポイント減
文化的知識	自文化		1	1	2	3	
	他文化			2	4	1	
能力	共感		1	1	4		1
	コミュニケーション力			2	4	1	
姿勢	好奇心				3	4	
	寛容度		2	1	1	3	

ルーブリック[異文化理解・対応能力]結果 (中期留学)

